或る書友への手紙

——書評を兼ねて

深瀬基寛

先日小生ホロ酔い加減でへんな手紙をお届けした記憶がありますが、さて何を書いたかこのごろ特に小生の傾向として酔醒の間が記憶で繋らず、責任回避上、実に便利なことになつたものだとわれながら驚いています。はたの迷惑はもとよりお察しします。

ボーラの『シンボリズムの遺産』のことを申上げたかと思いますが、その後よく考へてみると、あの本は実にいい本に違いないのですが、内容が英仏独露に跨つている上に、引用詩句が非常に多く、読むのには詩人の全貌を知るにたいへん重宝ですが、反訳となると、楽しみよりも圧迫感が先に来て、うつかり手をつけると命取りになりそうで一寸躊躇されます。スペンダーの『創造的元素』の方はその点気楽で、『歴程』がのせるなら、巻頭の「夢を孕む単独者」に続いて少くとも三四篇はのせてみたいと思つています。いま、オーウエルとエリオットを対象とた絶望論のところをやつています。近来こんな楽しい仕事は珍らしいことです。

それとは別に学校へ届いた本のなかに、Allen Tate というアメリカの文芸批評家の *On the Limits of Poetry* という本あり、高いアメリカ本なので学校へ買わして先日から読み始めましたが、これにはすつかり降参してしまいました。名前なら前から聞いており、何かよんで記憶もありますが、こんどの本は約二十年間の批評的収穫から粋を抜いて三百七十頁くらいの本にしたものですが、こんな奴がアメリカにいると思うとこちらに命が三つあつてもまだ足らんという気がします。結局はどの論文も詩の本質の問題へ帰入していますが、その書き振りというやつが尋常でなく、極く気軽なエッセイ体ながら、これほど手つぴどく急処をやりおつた奴を知りません。実は先日夜中に眼が覚めて、眠り薬のつもりで手を伸したのが悪く、朝までやめるわけにゆかず、そのついでに二三日ぶつ続けによみ、いまこれを書いているところです。「詩の三つのタイプ」という論文の最後の一行が「この問題については議論はこれくらいで打ち切りにしましよう。ここらあたりで眼のある人は見ればいい

のです」とあり、これには降参しました。小説論はドストエフスキーの「白痴」の最後の場面からとった「宙に泛ぶ一匹の蠅」という題をつけ、これまた天下一品の小説論と思いました。中村光夫氏を説服するにはこれに限ると思います(秘中の秘!)。論文は全部で三十篇くらい収つていますが、何も全部やる必要はなく、そのうち四五篇を訳して、文芸批評の極上等の見本として押し出せばいいと思つています。アメリカ文学の翻訳はまだなかなか下火になりそうにもないと思いますが、みなベスト・セラーをねらう奴ばかりでこんな良質の批評に誰も注目する者がありません。「伝統的社会とは何か?」という講演の原稿はヴァジニア大学で朗読したもので、日本人には不要なところもあるのですが、そのエッセンスに至つては七面倒なエリオットの伝統論よりも遙かに滋味があり、つまり伝統の欠如態、いわば伝統のネガ版を小説字以上にうまく描いて、うならされました。日本の批評文学はどうも一寸した思いつきを真正面からむきになつて主張するに急で、そのくせ関節が気の毒なほど弱く、説得力が逆比例するのですが、このネガ版式の方法からわれわれは大いに学ぶべきだと思います。形態面からいつても、文芸批評がとるべき形について最上級の見本を提出していると信じます。ロマン主義のマスクをいつまでも抜き切れない現代批評と、他面、リチャーヅなどの科学のマスクを武器として登場して来た新流行の批評に対して、これ以上の批評の批評というものは容易に見つからないと思います。またウエイドレよりも遙かに即物的で、直観的だと思います。ペイターとはまた違つた意味で批評がそのまま最高級の文学になつています。

こんなことを書いてゆけば切りがありませんが、ともかくこれは小生だけの自己陶酔でなく、書物のカバーにかいてある文句によると、アメリカでもこの二十年間の文芸批評界の一大形成力だということです。

拙著は素人には割に好評、詩人の一部には悪評と思いますが、英文学界は読者をもたぬ仲間ばかりの寄り合い世帯ですから、いろいろと暇にまかせて勝手な註文が飛び出すことと思います。「続エリオット」はなかなか書けそうにもなく、それについて、も一つ思い出したのですが、Four Quartets の解釈で非常に面白い本が匿名で、詩人の Roy Campbell の推辞をつけて出ました。64頁の本ですが、これも解説というよりも解説そのものが独立した立派な文章で、存在の四次元という新しい数理学の立場から実に細かく説いてあります。そういつても詩を数学に還元しようというような馬鹿気たものでは勿論ありません。他日、これもやつてみたく、これを以て「続エリオット」

に代えようかというずるい考えも起しています。

オーデンも来春出ると思いますが、これは見本程度のものです。オーデンから手紙が来て、そのうち一篇だけを抜いてくれ、自分の嫌いな詩だから、詩集から省いたのだ。これを入れられてはたまらん、といかにも詩人らしい返事でした。その代り、最新の詩集を二つ示してそのうちからも取つては如何と教えてくれましたが、こんな詩集はまだ学校へも来ていません。省いてくれというのは、アンソロジイにも入つていて可なり知られたもので、それが詩集に省かれていることは知つていましたが、有名という点で入れてみたのが失敗でした。どうも雑念が入ると、何ごともとかくやり損うもの——やはり昔の坊主は偉いものだと下性の知恵を今頃廻しています。

そういえばあなたの中世研究の脱稿の日を待望しています。そういえば、右のテートの本もまさに「詩とデカダンス」そのものです。この男の科学的ポジチヴィズムに対する徹底的な反撃そのものが逆に詩の意味を最も鋭角的に彫り上げています。「詩と科学」「詩と社会」……このとの一字で co-ordination になり下つたところに「詩のデカダンス」があるというのです。逆にいえばこれこそ現代に無類の「詩の弁護」——むしろシェレーの場合のこの「弁護」の防衛的な意味を打ち破つて攻勢に転じてるのですが、ピーコックの代りにリチャーズを置き、シェレーの代りにテートを置けば、この本の本質が一挙に明瞭になると思います。但しシェレーの詩そのものに対してはエリオット同様に、シェレーが気の毒になるほど喰い下つています。キイツ論はキイツの絶讃です。さてその攻勢も「主張」に硬化せずに、ユモアーそのものの形で提出されているところが味噌も味噌、上味噌だと思います。例えば、マリイの『キイツとシェイクスピア』については脚註でたいへん直観的な良書だと讃めておきながら、結局マリイの本は全体が何を言つてるやらさつぱり解らぬ、だから脚註で讃めておくといはんばかりの書振りなんです。ロマン主義＝詩のデカダンスと、科学的ポジチヴィズム＝詩の放棄＝社会的意志の単なる自己主張＝詩以前……この近代文学のガンをこんなに見事にえぐり取つてくれるのですから、これでは小生など命が三つあつても足りません。現代において詩とは結局なんであるか——さすがのリチャーズも、まして目下流行の文学の実証的研究家の有象無象も、このテイトの慧眼にはカブトを脱がないわけにはゆくまいと思います。朝からお酒という訳にもゆかず、こんな妙な独酌になつてしまつたことをお許し下さい。（十二月十九日朝）